



**Data**

監督: ブラッチャヤー・ピンゲーオ  
 出演: “ジージャー” ヤーニン・ウ  
 イサミタナン / 阿部寛 / ポ  
 ンパット・ワチラバンジョン  
 / “ソム” アマラー・シリポ  
 ン / タボン・ポップワンディ  
 -  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_

## 👁️👁️ みどころ

CGなし、ワイヤーなし、スタントなしのアクションに、タイの天才少女が彗星のごとくデビュー！こりゃまちがいなく、楊紫瓊（ミシェル・ヨー）志穂美悦子を超えた、映画史上最強の美少女！怒濤の生傷アクションには惚れ惚れだが、『蒲田行進曲』（82年）の[階段落ち]どころではない、相手方の重軽傷覚悟アクションは大変。本編終了後見せてくれる、撮影の舞台裏には爆笑、爆笑また爆笑！さあ、必見のタイ・アクション映画に集結だ！



### 同じ「チョコレート」でも、タイのそれは？

CGなし、ワイヤーなし、スタントマンなし、早回しなしという謳い文句で『マッハ！』（03年）を大成功させたブラッチャヤー・ピンゲーオ監督（『シネマルーム6』194頁参照）が『トム・ヤン・クン！』（05年）に続いて放った本作は、2008年2月の旧正月にタイで公開されるや『マッハ！』を超える大ヒット。さらに『レッドクリフ Part 』（08年）の2倍以上の興行収入をあげるミラクルヒットになったらしい。この不景気の時代にそんなヒット作で外貨を稼がない手はない、とばかりに、東洋から西洋まで本作を売り込むためにつけた原題は『CHOCOLATE』。

『チョコレート』といえば、2002年の第74回アカデミー賞で黒人女優としてはじめてハル・ベリーが主演女優賞を獲得した作品を思い出すが、こちらは人種問題をベースにしたすごく重いテーマの映画。また原題は『MONSTER'S BALL』で、『チョコレート』は女性の肌の色を連想させるために工夫してつけられた邦題（『シネマルーム2』43頁参照）。

このようにたまたま両者は同じ『チョコレート』というタイトルになったわけだが、最強少女が大活躍する邦題『チョコレート・ファイター』は、ハリ・ペリー主演の邦題『チョコレート』とは全く異質の痛快エンタメ・アクション・スペクタクル。同じ『チョコレート』でもこんなに違うとは・・・？

## ホンモノVSニセモノ、“ジージャー”は志穂美悦子似？

今や若手のトップ女優に成長した柴咲コウが最強アクションに挑戦したのが『少林少女』(08年)だが、これはCGを駆使したおとぎ話のようなアクションだから、ハッキリ言ってニセモノ。それに対して、本作でヒロインのゼンを演じた主演女優の“ジージャー”ヤーニン・ウィサミタナンは、「高校時代には96年バンコク・ユース・テコンドー大会で金メダルに輝き、さらに97年には国家が育成するテコンドー強化選手トレーニングにも参加した」というホンモノ。そんなテコンドーのホンモノが、プラッチャヤー・ピンゲーオ監督によって本作のためにさらに、「4年間にわたり体力、耐久力、柔軟性増強のための厳しいトレーニングに加え、ムエタイ、体操の基本、武器の使い方、スタントマンとのアクションシーンにおける立ち位置やタイミング、表情のつくり方、受け身の技法などの武術テクニックをたたき込まれた」というからすごい。

私は1970年代に何作か観た志穂美悦子主演のアクション映画が大好きだったが、本作で見せる“ジージャー”ヤーニン・ウィサミタナンの表情には、その志穂美悦子とどこか似たところが……。そんな風にしたのは、私だけ・・・？

## 邦画も見習わなくちゃ！

映画製作にはさまざまなテクニックがあるが、近時進歩が著しいのがCG(コンピューター・グラフィックス)とワイヤーアクション。これを駆使すれば俳優はどんなアクションでも可能だが、そこにはどうしても「つくられたもの」というイメージが残る。だって、キアヌ・リーブスの代表作『マトリックス』(99年)やアンジェリーナ・ジョリーの直近のヒット作『ウォンテッド』(08年)のように、人間が銃弾を避けるなどというのは所詮絵空事。そんな映画ばかり観ていると、カメラの前における生身の人間による肉弾アクションが恋しくなるのは当然だ。

本作が母国タイで大ヒットしたのはきっとそのため。そしてそれは、近時のハリウッド映画や邦画のCGとワイヤーアクションに慣れた私たちには、タイの映画ファン以上に新鮮。日本でこんな重軽傷覚悟アクション映画を製作しようとするれば、莫大な保険料がかかることは明らか。それは、本編終了後の撮影の舞台裏を見ればよくわかる。そのため日本でこんな肉弾アクション映画をつくることは不可能だが、なぜタイでは、あるいはプラッチャヤー・ピンゲーオ監督の下では可能なの？

チラシには「スタントなし!」「生傷アクション」と表現されているが、スクリーン上に

はそれを大きく超えた生身の人間による重軽傷覚悟アクションが展開される。ケガをするのはイヤだから、という理由でC Gやワイヤーアクションに走っている邦画製作者は、タイのプラッチャー・ピングーオ監督のこんなホンモノのアクション追求の姿勢を是非見習わなくちゃ。もっとも、エキストラの出演依頼がきても、私は断固お断りだが・・・。

## ストーリーは至って単純

本作はちょっとワケのわからない(?)少年時代のマサシの告白から始まるが、成長したマサシ(阿部寛)は日本の大物ヤクザ。今マサシと対峙しているのは、凶暴で冷酷なタイマフィアのボスであるナンバー8(ポンパット・ワチラパンジョン)だが、その側にはちょっとケバいいがれい女ジン(“ソム”アマラー・シリポン)がいた。ジンはナンバー8の女として権勢をふるい、貸金の取り立てを含むあこぎなやり方でシマを支配していたが、ひょんなことからマサシとジンの間に愛が芽生えたから大変。

映画前半は、バックからではあるが阿部寛のオールヌード姿やジンとの激しいベッドシーンを見せてくれるが、結局ジンは身の安全のためマサシを帰国させることに。マサシの帰国後生まれたのがゼン(禅)だが、脳の発達異常という医師の診断にジンはビックリ。しかし、成長するにつれて明らかになったのは、自閉症のゼンはテレビのアクションシーンを見ただけでその技を習得できるという並外れた身体能力の持ち主だということ。今はナンバー8の支配下から離れ、1人ひっそり生活していたジンだったが、白血病に侵されたジンの治療費を稼ぐためゼンの幼なじみのムン(タボン・ポップワンディー)が、ゼンの身体能力を見せて観客から小銭を稼ぎ始めたところ、それがナンバー8の耳に入ったから大変。さらに、かつてのジンの貸金名簿にもとづいてムンが貸金の取り立てに行き、そこでゼンが抜群の格闘能力をみせたから大変。これによって、否応なくゼンはナンバー8の巨大組織と対決せざるをえなくなったわけだ。そこに日本からもマサシが応援に。

さあ、そんな単純なストーリー仕立ての中、クエンティン・タランティーノ監督の『キル・ビル~KILL BILL~Vol.1』(03年)における青葉屋敷の大立ち回りを彷彿させる、クライマックスでの重軽傷覚悟アクションとは?

## 本編が終わっても、絶対立たないように!

二転三転はおろか七転八転する面白い映画『ワイルドシングス』(98年)(『シネマルーム1』3頁参照)では、本編終了後字幕が流れる前に、あの犯行、この犯行の裏側を見せてくれた。また、本編終了後に流れてくる字幕と平行して撮影風景の舞台裏を見せてくれる映画も時々ある。香港のアクション大スターであるジャッキー・チェン主演の映画にはそれが多い。

しかして、この映画については本編を終わった後字幕が流れる前にすぐに席を立つことは厳禁!それではこの映画を観た価値が半減するはずだ。その理由は、本編鑑賞中に何度

も思わず「痛っ！」と声をあげかけた、体当たりアクションの数々の舞台裏が、多くの治療スタッフ、医療スタッフと共に映し出されるから。アクション映画に出演する俳優に生傷が絶えないのは仕方ないが、この映画は生傷ではなく、重軽傷は当たり前で、場合によっては命がけ？

深作欣二監督の名作『蒲田行進曲』（82年）では、「階段落ち」をテーマとして、常に脚光を浴びる主演俳優の銀ちゃんこと倉岡銀四郎と大部屋俳優ヤスの生きザマが描かれていたが、本作にみる重軽傷アクションの数々は、「階段落ち」をはるかに超えるもの！

2009（平成21）年3月6日記

アクションの原点を本作から！



井藤士 坂和章平のLAW DE SHOW

## 「チョコレート・ファイター」

（今日からなんばパークスシネマで公開）

なぜ本作が大坂アジア映画祭2009で最初に上映？それは「マッハー」（〇三年）に続くCGなし、ワイヤーなし、スタントなし、早回しなしが謳い文句の重軽傷覚悟アクションがパワフルでメチャ面白いから。ハル・ベリーが黒人初のアカデミー賞主演女優賞を獲得した「チョコレート」（〇二年）は人種問題中

心の重いテーマだった本作は、本作はゼン役の格闘技の天才美少女に注目！章子怡は「グリーン・デスティニー」（〇〇年）で、柴咲コウは「少林少女」（〇八年）で闘ったが、最高の美人アクション女優はやはり「女必殺拳」（一九七四年）等の志穂美悦子？とこそ、エッチャンを上回るテコンドーの実力者

が、八四年生まれの愛称「ジーシャ」ことヤニン・ウイサミタナだ。本作のため折り紙付きの實力にさらに四年間磨きをかけたから、その身のこなしと突き・蹴りの威力はアールズ・リーや李連杰（ジュネット・リー）級？

白血病に侵された母親の治療費を工面するためにゼンが対決を余儀なくさ

れたのは、タイ最大のマフィア組織。生き別れになった日本ヤクザの父親（阿部寛）も日本刀を引っ提げて応援に駆けつけるが、それはゼンのひたむきな闘いの引き立て役だけ。全編を貫くゼンのファイターぶりはただ息を呑むばかり。リヤ、かつて薬師丸ひろ子がセーラー服姿で機関銃をぶっ放した時以上の快感！本作では早めに席を立つこと厳禁。なぜなら字幕終了後に流される撮影

裏風景こそ本作の真骨頂だから。肉弾と肉弾の激突にケガ人続出。よくぞ死人が出なかつたものだが、その保険料はHow much？ 経済不況にもがくご時世、こんな映画でスツキリと。所詮頼りになるのは自力のみ！ 政情不安に苦しむ微笑みのタイ国を魅らせるために、せひ大ヒットを！

大阪日日新聞 2009（平成21）年5月23日